

## 第一人称が動作主になる中国語の受身文 —自己批判の意味を表す場合—

路 浩宇

### 0. はじめに

本稿は第一人称が動作主になる中国語の受身文が自己批判の意味を表す動機を研究するものである。不如意な遭遇を言う受身文の動作主が発話者自身である場合、それは発話者が自らの行為によって不愉快・不利益を被ったことを積極的に伝えたものと理解できる。これは「自己批判の受身文」と呼ばれている(杉村 1991 参照)。

まず、第一人称が動作主になる受身文を見てみる。

- (1). 马晓军给我塞了几次纸条, 都被我看也不看地撕掉了。(CCL)  
[馬曉軍が何度も渡してきた紙切れは私によって<sup>1</sup>読まれ  
せずに破られた。]
- (2). 钱叫我<sup>2</sup>付了车费和挂号费了。(杉村 1991)  
[お金は私に交通費と申込費として使われた。]
- (3). 裤子上面被我<sup>3</sup>弄了一个洞, 我很沮丧, 但依然会穿它。(CCL)  
[ズボンには私によって穴が一つ開けられた。私はかなりがっかりしたが、  
相変わらず穿くこともある。]

以上の三例はいずれも[N<sub>受動者</sub>+“被我”/“叫我”+V+C]の構造を有する。こうした第一人称が動作主になる受身文の意味的特徴に関して、杉村(1998)では次の3つのパターンが示されている<sup>3</sup>。

- ① “说话人将自己客体化, 即说话人用旁人的眼光叙述自己” [発話者が自らを客体化する。すなわち、発話者は第三者の立場で自分のことを客観的に述べることである]。例えば
- (4). 她的头发, 当年是那么乌亮丰厚, 被我戏称为“漆黑的羽毛”……。  
[彼女の髪は当時あんなにも黒くてつやがあり、ふざけて私に「真っ黒な羽」と呼ばれていた……。]

② “进行自我批评，表达一种‘自己种的苦果自己尝’的意思”[自己批判を行い、「自業自得」のような意味が表される]。例えば

(5). 本来，我有很多机会可以学些本事，替他分忧，可是，多少时间，被我白白糟蹋过去！

[もともと、私には何かを身に付け、彼の苦労を軽くする機会がたくさんあった。しかし、どれほどの時間が私によってむざむざと無駄にされたことだろう！]

③ “进行‘自我赞赏’，表达很不容易做成的事情‘居然’或‘终于’由自己做成了的意思”[「自己を称揚」し、難しい目的を「意外に」あるいは「やっと」自分によって達成する意味が表される<sup>4</sup>]。例えば

(6). 这个秘密终于被我发现了。

[この秘密はついに私によって突き止められた。]

杉村（1998）では、第三類の自己称揚の意味が表される受身文について構文と語用的な面から詳細な分析が行われているものの、第二類については検討されていない。

通常、受身文では発話者は自分の感情を文頭に立つ受動者主語に託し、受動者の立場に立って発話する。これに対して自己批判の受身文においては発話者が出来事の動作主として作用し、目的語の位置にあると同時に影響・被害を受ける存在でもある。このように発話者が動作主と同一であり動作主寄りの視点で発話することは、受身文ではあまり見られない現象であり、対応する日本語訳の不自然さにもそのことが現れている。

本稿では先行研究を踏まえ、自己批判の受身文について、構文的意味的な特徴を明確にした上で、動作主寄りの視点から一般的な受身文との相違を論じる。

## 1. 無情物が用いられる主語

自己批判の受身文においては、無情物が主語になることが少なくない。CCLコーパスから抜き出した例文の主語を分析すると、無情物主語は使用頻度がかなり高く、有情物の主語としては動作主の“我”に限られることが分かった<sup>5</sup>。刘月华(2001: 754)は受身文の意味的特徴について、ある動作行為に影響され、受動者に変化が生じることでであると指摘している。しかし、自己批判の受身文は一般的な受身文の意味的特徴と異なり、受動者が注目される述べ方より、動作主の“我”が受身文に内在する不愉快や不如意といったニュアンスを通して、自発的に自分の過失を後悔する気持ちを訴えるという特徴を有する。このよう

な発話意図は受身文の語用的特徴に関わっていると考えられる。

発話者は自分の発話意図によって構文形式を選ぶのが一般的である。杉村(1991)は発話者の抱いた不如意な“感情色彩”を表す最もすぐれた手段は受身文に他ならないと指摘している。次の三例を見てみる。

- (7). a 钱叫我付了车费和挂号费了。(再掲(2))  
 [お金は私に交通費と申込費として使われた。]  
 b 我把钱付了车费和挂号费了。  
 [私はお金を交通費と申込費用として使った。]  
 c 钱, 我付了车费和挂号费了。  
 [お金は、私が交通費と申込費として使った。]

これらの三例で述べられている出来事は同じであるものの、それぞれ受身文、処置文、題述文の形式で表現されている。(7a)は本来ならまだ残っているべきお金が、私によって交通費と申込費として使われてしまったという本意な意味を言外に持つ。一方、(7b)は例のお金をどうしたかという、私がお金を交通費および申込費として使用したという意図的、処置的な意味を有する。また、(7c)は単にお金がどうなったかを説明している文である。

自己批判の受身文は受動者が無情物であることが多く、登場する有情物としては動作主となる“我”に限られる。受身文の表す不愉快や不如意の意味は一般的に受動者にしか及ばないが、自己批判の受身文は一般的な受身文と異なり、不如意の感情は受動者だけでなく、動作主までも波及する特徴を有する。

## 2. 「自己批判」を際立たせる文脈

自己批判の受身文は一般的な受身文と同じように[N<sub>受動者</sub>+“被”/“叫”等+N<sub>動作主</sub>+V+C]の文構造を有するが、対比や転折の意味を持つ文脈でよく用いられる。次の例を見てみる。

- (8). 剪彩后, 我听艾老说: “多好的红绸子, 叫我给剪断了!” 听得出来, 艾青的话语里蕴含着深深的痛苦、惋惜和歉疚。(CCL)  
 [テープカット式典の後、私は艾先輩の話聞いた、「あんなにもよい赤い絹が私によって断ち切られた!」艾青の話に深い苦痛、残念さと悔やむ持ちが含まれるのを聞いて分かった。]
- (9). 本来, 我有很多机会可以学些本事, 替他分忧, 可是, 多少时间, 被我白白糟蹋过去!(再掲(5))

[もともと、私には何かを身に付け、彼の苦労を軽くする機会がたくさんあった。しかし、どれほどの時間が私によってむぎむぎと無駄にされたことだろう!]

- (10) 当时有一位青年医生建议提取适量血液检查, 被我忽略了, 真有些后悔!  
(杉村 1991)

[あの時一人の若い医師が血液を適量取って検査するように意見を出したが、私によって無視されてしまった。本当に後悔している!]

- (11) a 钱叫我付了车费和挂号费了。(杉村 1991)

[お金は私に交通費と申込費に使われた。]

- b 本应该剩下的钱叫我付了车费和挂号费了。(作例)

[本来ならまだ残っているべきお金が私に交通費と申込費として使われた。]

例 (8) の“多好的”は主語(受動者)である“红绸子”の連体修飾語として働いているだけではなく、発話者の感嘆の語気も表しており、受動者(“红绸子”)の良さを失ってしまったことを惜しむ気持ちによって動作主である“我”の過失(断ち切ってしまったこと)が示されている。また、例 (9) と例 (10) においては、“本来”や“当时”に導かれる出来事はいずれも已然の事柄を表す。“本来”や“当时”の状況が“现在”の状況と対比され、起こしてしまったことはあとになって悔やんでも取り返しがつかないというニュアンスが表される。例 (11a) においては、発話者の悔やむ気持ちを際立たせる文成分は見られないものの、主語である“钱”の前に「本来ならまだ残っているべきである」という意味が容易に読み取れる。このため、例 (11a) より、例 (11b) の方が「使ってはいけないお金を発話者の“我”が使ってしまった後悔する気持ち」が表されている。

杉村 (1998) では、自己称揚の意味が表される受身文において用いられる“终于”や“居然”等の副詞の重要性が指摘されている。要するに、これらの副詞が「達成するのが難しい」や「意外」等のニュアンスを含意し、「自己称揚」の意味がこれらによって前景化されることになる。次の例文を見てみる。

- (12) a\*饭被我煮好了。(马真 1997: 164)

[ご飯が私によって炊きあげられた。]

- b 饭终于被我煮好了。

[ (炊きあげるのが難しい状況で) ご飯はやっと私によって炊きあげられた。]

马真 (1997: 164) は多くの受身文は望ましくない事柄を表す場合に用いられると主張している。この説に基づき、例 (12a) は述語が望ましい事柄を表すため、成立しない。しかし、例 (12b) のように述語の前に副詞の“终于”を付加すれば、自然に成立するようになる。“终于”は期待したことが長い過程を経た後に実現することを表す。この例に用いられる“终于”は「炊きあげるのが難しい」ことや「動作主が苦勞する」ニュアンスを際立たせるため、難事を達成する意味が明示されるようになる。

「自己称揚」文にしる「自己批判」文にしる、主題を際立たせる文脈や対比の役割をする文脈で用いられないと成立しにくい。次の例を見てみる。

(13) a 那个人被我打了。(作例)

[あの人は私に殴られた。]

b 那个坏蛋被我打了。(作例)

[あの悪者は私に殴られた。]

c 文化大革命时期，很多无辜的老师都被我打过。(CCL)

[文化大革命の時期に、多くの罪のない先生達が私に殴られたことがある。]

以上の三例はいずれも「受動者が私に殴られる」という事柄を表している。(13a) は単なる受動者、動作主と出来事を陳述する文である。述語の表す事柄が望ましいか否かは読み取れない。(13a) に対し、(13b) と (13c) はそれぞれ動作主の善悪を際立たせる限定詞(“坏蛋”と“无辜的”)を用いているため、“感情色彩”がはっきり読み取れるものである。(13b) では、受動者になるのは“坏蛋”である。要するに、動作主である“我”から見れば、受動者は「よくない者」であり、罰を受けるべき者であるが故に、自分の行為(悪者を殴る)を正当化することになる。これは「自己称揚」の受身文が成立する論理上の基盤となる。(13b) に対し、(13c) の受動者は“无辜的”の修飾を受けている。要するに、動作主の“我”は殴られるべきではない者を殴ったため、道義に反する者となる。(13b) と (13c) は同じ「受動者は私に殴られる」の意味を表しているものの、それぞれの動作主には「自己称揚」と「自己批判」のニュアンスが読み取れる。これは「善悪」を区分する修飾語がそれぞれの文に用いられるためである。

上述のように、自己批判の受身文が表す出来事には已然の事柄が少なくない。これらの文は動作主の善悪を際立たせる文脈や対照・比較するニュアンスを持つ文脈で多く使われている。こうした文脈によって、発話者自身の誤りを自覚

的に認め、悔やむ感情が表されるようになる。

### 3. 動作主（目的語）寄りの視点

高見（2011:15）では発話者の視点規則が指摘されている。高見によれば話し手（や書き手）は一般に、自分に近く親しみのある人や物寄りに自分の視点を置き、それを文の主語（または主題）にして当該事象を述べるというのである。久野暉（1978:169）では受身文は通常、主語寄りの視点を最も取りやすく、目的語寄りの視点を取るのには困難であるとしている。同研究では発話者が受身文の形式を用いる理由は、行為対象に対する視点的接近が無ければならないからだとされている。次の例を見てみる。

(14) 当官的一走，慰问对象就被忘了个一干二净。(CCL)

[官員が去ってから、慰問する対象はさっぱり忘れられてしまった。]

例(14)は発話者が出来事の受動者（主語）である“慰问对象”に視点を寄せて述べた文である。発話者が受動者である“慰问对象”を身内のように取り扱い、受動者の立場から発話し、受動者への強い関心を表している。結局、“当官的”は責任者になり、“慰问对象”は被害者になるというニュアンスが発話者の発話視点に表されるのである。ここには被害者の不愉快・不如意の気持ちが表現されているといえる。

通常、受身文は主語寄りの視点で受動者がある動作・行為に影響されて変化を受けることを中心に表現するため、動作主である目的語は文法上の重要性を失い、特に明示する必要がある場合以外は省略することができる。例えば例(14)は受身文のマーカーの後ろに動作主がない文である。また、例(15)と例(16)のように目的語が省略されるや疑問代名詞“谁”のみが来る場合も少なくない。

(15) 狗被[φ]踢了一脚。(劉月華 1991: 642)

[犬は一回蹴飛ばされた。]

(16) 我的车不知被[谁]刮了。(CCL)

[私の車は誰かによって引っかき傷をつけられた。]

これらの受身文と異なり、自己批判の受身文では受動者を持たない例は筆者が調査した範囲では見受けられなかった。目的語の位置に立つ第一人称の“我”は発話者と動作主であるだけでなく自己批判の対象でもあり、重要な文法的役割を果たしているため省略することができない。

自己批判の受身文では叙述の重点を「発話者の落ち込みや反省する気持ち」に置く傾向がある。例えば、

- (17) 裤子上面被我弄了一个洞, 我很沮丧, 但依然会穿它。(再掲 (3))  
 (18) 当时有一位青年医生建议提取适量血液检查, 被我忽略了, 真有些后悔!  
 (再掲 (10))

例 (17) と例 (18) はどちらも自己批判の受身文である。“我很沮丧”や“真有些后悔”といった語句が後半に出てくる。これらの語句は動作主が直接的に後悔している感情を表すものであり、全文の叙述する焦点でもある。これらに対し、前半に記述された已然の出来事は“沮丧”や“后悔”の原因である。

以上をまとめてみると、自己批判の受身文は受動者に同情するというよりは、動作主が自己反省と自分の責任を追及することが主な発話意図なのである。このため発話者は目的語寄りの視点を取ってしまうのである。これが自己批判の受身文の特質である。

#### 4. 「自己批判」の意味が形成されるルート

本節では、認知言語学の図地分化の観点から「自己批判」の意味が形成されるルートを検討していく。

人は知覚において刺激や情報を均等に見るのではなく、相対的に重要なものと、そうでないものをほぼ自動的に振り分ける。知覚した対象のうち、前者は「図」、後者は「地」と呼ばれる。図は単独で知覚されえず、地があって初めて図として知覚が成立するものであるし、地は図に対して背景を与えるものであるが、地の姿によって図の解釈も変わりうるため、図の解釈に影響を与える(辻 2002:130)。

第1節で述べたように、自己批判の受身文では、無情物主語がよく用いられ、有情物は動作主の“我”しか有り得ない。

図地分化の観点から見れば、図として選び出されるものには特別な性質がある。一般に、動くものは図になりやすい。これによって、有情物である動作主は自主的に感情を表し、動的な存在となり、図としてみられやすくなる。一方、無情物となる受動者は一般に静的な存在であり、地として見られやすくなる。動作主と受動者の関係は図1のように、動作主は受動者より前にあるように見え、受動者はその後ろに連続して広がっているイメージができています。これが第一人称に用いられる動作主の言動が焦点化されやすい動機であると考えられる。

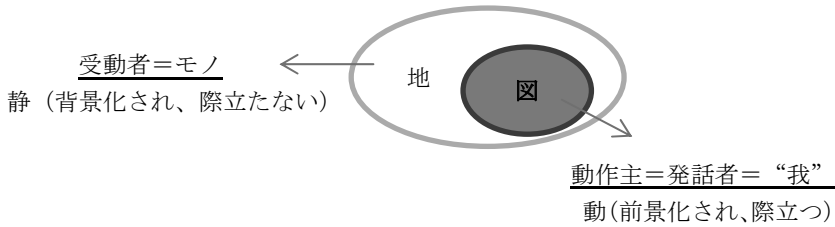


図 1

一般的な受身文では発話者が出来事における受動者（主語）に視点を寄せて発話するとされる。この受動者寄りの視点によって、動作主が責任者となり、批判する対象となる。これに対し、自己批判の受身文は第一人称が発話者と動作主も兼ねており（発話者＝動作主＝“我”）、さらに受動者になるのは無情物の方が多いため、動作主と受動者の関係はアンバランスになる。心理学の研究が明らかにしているところでは、図は地よりも意味、感情、そして美的な価値と結び付けられやすい（F. ウンゲラー1998:192 参照）。自己批判の受身文は動作主が受動者に悪い影響を与えるものだけでなく、自発的に受動者に対する取扱い方を反省し、自分の過失を後悔する気持ちを訴える前景化される存在でもある。動作主自身が批判する対象である、これが発話者や動作主の「自己批判」が形成される動機となる。

## 5. 終わりに

発話者がどの構文形式を用いるかはその発話意図と大きく関わっている。自己批判の受身文が一般的な受身文と最も異なるのは発話者が受動者寄りの視点ではなく、動作主寄りの視点から不愉快・不如意の感情を表す点である。自己批判の受身文は無情物主語の使用頻度が高く、通常は対比や転折の意味を持つ文脈で用いられる。文の前半は自分の過失に影響された受動者の重要性が表されるのに対し、後半は動作主である“我”の「過ち」を後悔する気持ちが際立たされる。第一人称が同時に発話者と動作主の役割を担うため、自分の立場に立って自分を批判するのがこのような受身文の特質である。この場合においては第一人称が用いられる動作主目的語は重要な文法的機能を有するため、一般



的な受身文のように省略することはできない。周延的な受身文としての自己批判文は特有の文構造と語用的特徴を用い、受身文の領域において重要な位置を占めていると考えられる。

## 注

- 1 本稿では一部不自然な日本語訳が見られるが、原文の意味を忠実するために、“被我”は「私によって」あるいは「私に」と訳した。
- 2 受身文のマーカーとして用いられる“被”と“叫”の機能上の相違については、本稿では考察の対象とはしない。
- 3 ①～③は杉村（1998:58）から引用したものである。日本語訳は引用者による。
- 4 このような受身文の形式について杉村（1991）は「自己称揚の被動文」と定義している。また、「難事が話者本人或いは話者の感情が移入された存在によって達成されたという場合にこのタイプの受身文が用いられる」と杉村（1991）は指摘している。
- 5 CCL では、有情物が用いられる「自己批判」の受身文はがわずかながら見られる。例えば、“文化大革命时期，很多无辜的老师都被我打过。[文化大革命の時期に、多くの罪のない先生達が私に殴られたことがある。]”。

## 主要参考文献

- F. ウングラー/H. J. シュミット『認知言語学入門』（池上嘉彦 ほか訳）（『*An Introduction to Cognitive Linguistics*』の邦訳）、大修館書店、1998年。
- 金水敏「場面と視点」『日本語学』第九号、十二～十九頁、明治書院、1992年。
- 木村英樹「BEI 受身文の意味と構造」『中国語』六月号、十～十五頁、内山書店、1992年。
- 久野暉『談話の文法』、大修館書店、1978年。
- 劉月華主編『現代中国語文法総覧』（下）、相原茂 監訳（《实用现代汉语语法》の邦訳）くろしお出版、1991年。
- 杉村博文「遭遇と達成」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』、二百七十七～二百九十四頁、くろしお出版、1991年。

高見健一『受身と使役』、開拓社、2011年。

辻幸夫『認知言語学キーワード事典』、研究社、2002年。

楊凱榮「語用例にみる日中表現の違い」『日本語学』第十一号、五十四～六十四頁、明治書院、2013年。

刘月华《实用现代汉语语法》、商务印书馆、2001年。

马真《简明实用汉语语法教程》、北京大学出版社、1997年。

杉村博文〈论现代汉语表“难事实实现”的被动句〉《世界汉语教学》第四期、五十七～六十四頁、1998年。